

トモコとのふれあいの中で

都丸千寿子

本園は街中でありながらも、比較的自然には恵まれており、竹林や雑草園、クヌギなどを始めとした樹木も多く、大きな動物小屋にウサギやわとりをたくさん飼育している。子どもたちは今までもその環境の中できつといろいろな経験をして育っていたのだろう。しかし、すでにそこにある

自然に対して、今まで自分がどれ程の意識をもっていたのだろうか、自然とふれあう中で子どもたちの何がどのように育っているのだろうか、そのよう

なことを考え子どもたちに寄り添っていくと、今までは見えなかったことが見えてきたように思う。そこで、偶然に学級にやってきた小さな生き物、ヒヨコとの出会いやふれあいを通しての出来事から、その一端に触れてみたいと思う。

二羽のヒヨコ

二羽のヒヨコが四歳児の本学級にやってきたのは十月中旬のことである。ある催し物で希望者に

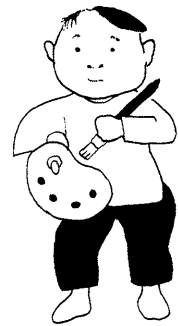
配っていたのをA児がもらい自宅に持ち帰ったのだが、数日飼ってみて自宅ではどうも飼いきれないと考えた母親とA児が「幼稚園で飼ってほしい」と言って連れてきた。とりあえず、「何とかなるかな」という気持ちで預かった。

登園してきた子どもたちは、小さいヒヨコを見て、「かわいい、先生、このヒヨコどうしたの？」と口々に言う。理由を説明するとともに、幼稚園の動物小屋にはすでに飼っているにわとりがい、そこに一緒にするとこの小さいヒヨコはつかれてしまうかもしれないことを話すと、「じゃあ、黄組で飼おうよ」と言い始めた。子どもたちの気持ちを感じ、学級で飼うことにした。

子どもたちは次々にヒヨコを抱き、「かわいい」「ほわほわだねえ」と膝の上でヒヨコとのふれあいを楽しんでいた。中には握り締めるように持つ子もあり、「そんなに強く持ったらかわいそうで

しょ」などと声をかける子どもでできた。カップに餌や水を入れて食べさせながら、「たくさん食べて大きくなってね」とヒヨコに声をかける子どもたちの表情は、とても穏やかで優しさにあふれていた。

B児が「ねえ、ヒヨコに名前を付けてあげようよ」と言い出した。「そうだね」と、学級の子どもたちがいろいろな名前を言い始めた。その中で『サトシ』と『コジロウ』という名前に人気が集まり、みんながその名前に賛成した。「大きい方がサトシで、小さい方がコジロウね」とB児が言い、ヒヨコの名前が決まった。



成長の様子への気付き

ヒヨコは数日のうちには産毛が生え変わり始め、白い羽が背中に見え始めた。大きさもあつと言う間に二倍、三倍になり、登園してきた子どもたちは「昨日より大きくなってる」「羽が生えてる」とその変化に驚いたり喜んだりしていた。餌もたくさん食べるようになり、今まで使っていたカップでは軽過ぎてすぐに倒してしまう。また、ヒヨコの時に入れておいた段ボールでは小さすぎて飛び出してしまふ。「先生、もつと大きな入れ物ない?」「もつと大きな餌入れないかなあ?」と気付く子がでてきた。そこで、物置から少し大きめの飼育カゴを探し、陶器の餌入れと水入れを買ってきた。子どもたちは「よかったね、ヒヨコちゃん」とまた嬉しそうな顔をした。

このヒヨコは学級の人気者になり、朝来ると、「先生、サトシたち出していい?」とカゴから出

し、餌をやったり抱いたりするようになった。今までは虫も触れなかったC児がコジロウをしつかり自分の手の中に抱き、「お散歩しようね」と園内を連れて歩き、時には腕や肩に乗せて頬をすり寄せる姿まで見られるようになった。肩から羽を羽ばたかせて舞い降りるコジロウの姿に「わあ、ヒヨコも飛ぶんだねえ」と感動して拍手する子どもたち。これは飼育小屋で飼っていたのでは分かんかった姿だろうと思う。

ある朝、登園してすぐにサトシたちの様子を見ていたD児が、「先生、サトシたちの頭が割れて黄色いものが出てる」と大きな声で叫んだ。多くの子どもたちが寄って来て「何これ?」と言い始めた。E児が「これって、にわとりの頭にある、赤いやつじゃないの?」と言うと、F児が「それって、とさかのことだよきつと」と言った。

「でも赤くないよ」「これから赤くなるんじゃないのかなあ」「とさかって赤くなる前は黄色いん

だ」などとサトシたちの変化の様子に一喜一憂している様子だった。その後も羽が大きくなってきたことや足が太くなってきたこと、爪も大きくなってひっかかれるとちよっと痛いことなど、サトシたちの大きくなる様子を間近で見ても、触っても感じていた姿が毎日のように見られた。今までも飼育小屋でヒヨコを飼っていたことがあるが、このような変化の様子に気付く子が果たしていたのかな。もしかして気付いていたのかもしれないが、網越しで違う世界の出来事のような状況だったのかなと思うと、子どもたちが、小さな生き物とふれあい、その中で様々な経験をして様々な思いを抱くことは、生き物と共に生活する中でこそ可能なかもしれないと思うようになった。

ヒヨコのお母さん

日々成長するサトシとコジロウ、その姿を毎日見つめているG児がいた。G児は、家庭内に問題

を抱え、多分本人もそれとなく感じているのだろう。時折寂しそうな表情を見せたり教師に異常なほど甘えてきたりすることがあった。A児たちと一緒に遊ぶこともあるが、ふと気付くと一人の世界で遊んでいる子だった。ほかの子がサトシたちと遊ぶより、友達と遊ぶことが楽しくて、サトシたちのことを忘れていても、G児だけは必ず「先生、餌がなくなってるよ」「カゴの中、汚れてるよ」「カゴが狭くてかわいそうだから出してあげようよ」と、ヒヨコを気遣い、遊ぶ時にもコジロウを膝に乗せてままごとをしたり、一緒に走り回ったり、抱いてかかれんばをしたりする姿が見



られた。サトシとコジロウも子どもたちが好きなのか、抱かれてうとうとと眠り、膝の上でおとなしくしていた。「G 児ちゃん、ヒヨコのお母さんみたいね」と言うと、「そう、G は、ヒヨコのお母さんなの。だからヒヨコを大事に面倒みてあげなくちゃね」という言葉が返ってきた。

私は、とりあえずヒヨコを預かった。そして保育室でカゴに入れてヒヨコを飼い始めた。もし大きくなつて飼いきれなくなつたら動物小屋に移すか、隣の小学校に引き取ってもらえばいいかなと、考えていた。しかし、G 児の言葉を聞き、その思いを知り、当時の安易な考えが自分の中で崩れていった。生き物を飼うということ、その生き物に思いを寄せるということ、その子どもたちの心を大切にすること、このことをG 児から教えられた。子どもたちは生き物と生活する中で最初は好奇心からかもしれないが、興味を持ち、かかわっていく。そして、世話をするうちにかわ

いいという思いや大切にしたいという思いが育っている。そう思ったとき、『もつともつと、子どもたちの気持ちを大事にして、このヒヨコも大事にしていかなくては』と考えるようになった。

共に生活するものとして

十一月下旬に『動物ふれあい教室』を実施した。これは、県が支援している事業で、園に一人担当の獣医師が派遣され、飼育している生き物について、抱き方から始まって、飼育に必要な様々なことを子どもたちに分かりやすく教えてくれるというものだった。この日は四歳児は初めての動物ふれあい教室で、ウサギをサークルに出してふれあいながらいろいろなことを教えてもらった。

すると、途中、G 児が「先生、サトシたち、連れてきてもいい？」と言いだした。『ウサギたちとふれあっているところに？』とも思ったが、「どうしたの？」と聞くと、「動物のお医者さん

に、サトシたちのこと、聞きたいの」と言う。なるほど、G児にとっては網の中のウサギより、せつかならサトシたちのことが知りたいのかと思いい、「そうか、連れてこよう」とサトシを連れてきた。

獣医師を目の前にすると、G児は何を聞きたいのか分からないのかモジモジしていたが、獣医師に「お名前は？」と聞かれ、「サトシ」と答える。「どのくらいの時から飼ってるの？」と聞かれ、「このくらい」と両手をすばめて見せるG児。「そう、ヒヨコから飼ってるんだ。男の子？ 女の子？」と聞かれ、「わかんないの」と言うのと、獣医師はニワトリの絵を見せ、「これから大きくなると、このときが大きくなるからね。うんと大きくなると男の子。でもね、ときかより足の方がよく分かるよ。ここに角みたいにぶちんが出てきたら男の子なんだよ」と絵を指差して丁寧に説明してくれた。そして「ポケモンとかではアツと

言う間に大きくなっちゃうけど、本物の生き物ってゆっくりゆっくり大きくなるんだよね。これからも大事にしてあげてね」と言われ、G児は嬉しそうに「うん」と応え、サトシを抱いて保育室に戻って行った。

それからサトシとコジロウは子どもたちを抱かれ、手乗りヒヨコ（ニワトリに近いが子どもたちはヒヨコと主張する）の別名をもって共に生活している。時にペランダに落とし物をして「コラ、サトシだめじゃないか」と言われて追いかけるられもしている、G児はサトシたちのお陰か、一時とは違った明るい表情で過ごしている。できればこのままできる限り子どもたちの近くで一緒に……と思う毎日である。

（群馬大学教育学部附属幼稚園）